



玉音ノ卷之三

卷之二



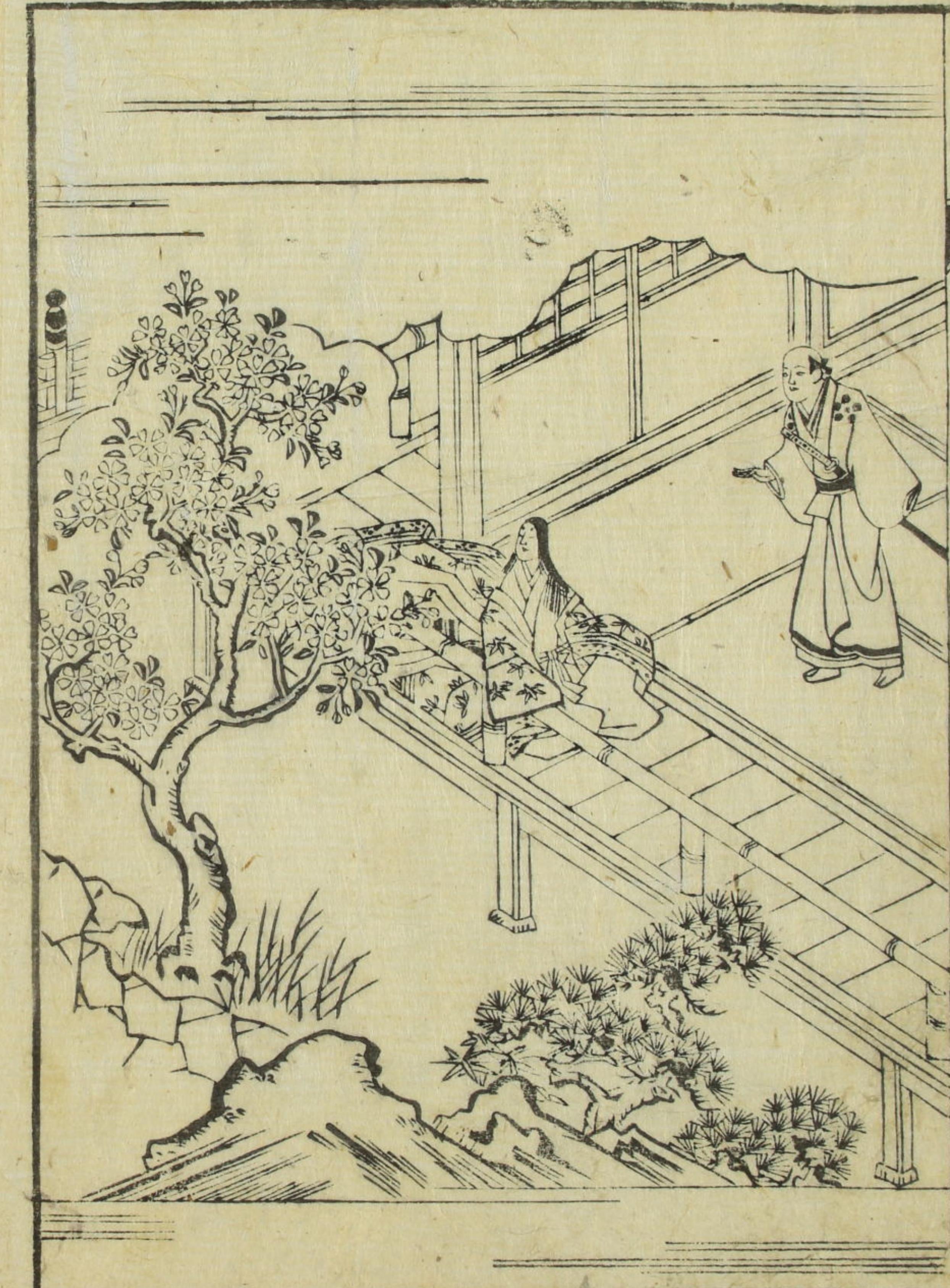
東門三條橋のあ櫻泉ちのやま高生塚
さみうも圓向秀次又内閣秀吉に孫安藤公
あり。車両つゝとく紀列も野みかく自害
は該所の三條橋の下に廻りしきり。秀次
二人同死す。秀吉三十餘人をすらすら仰首のま
まとくえ殊死し。その死體と仰首とひらりと
中少葉こめうに仰とはくきり。秀吉の令によ
て生捕と号えどり。ひれ三條橋の東に傍に安藤
の家と能生姓。能生姓の一人の久保

卷之三

あくを爲す事へやう。とて小鳥が姫ふるヰアツシに門をつまむ是
能御のひかく、美男なり。と同様にゆくも並にほ
きわば、小鳥未だのり。とすへんがふとく。金綿の面も
あふが、多けらう。いはる。とすへんがふとく。金綿の面も
川器の上とどか。様の本ちる陰に葉ふるみんあり
がふはうり。難に毛毛等事とつみ難どうを。眼あり。圓き
竹塀にうちて、毛と一聲とうといくれの。とす。あは
が、毛毛等事うるとのひたつ。毛よ出月。とす。毛に
ゆうあよひの程十み六半毛。とつまびうじま。か細め
白毛。毛もあつろづ。竹塀ふらうひひかうのふる毛
とす。毛に

又、またにうる毛の竹塀

下りて、あくをも者なり。人
たはやとかいとづきとせんれど、ふゞとまをば。たはや
ちもてこへらるゝのほん。ゆくさくまぐくのゆくとい
きふねあくび。づよづよえもやとらざき。か細か細
ひくわ。がちあらう。難の程。敵らく。住候。と
よめあく。がふり。をとざひくとく。うふこの
毛。毛とまう。とばふくもとく。やうゆうとくとく。うふ
うふとくとく。ねどまのうやかくねまく。めくうう
うたゆたうとく。かくひも。日とてに書たり



とおもてよに寄りきへんやとつば。まじめに壁にたづ
えとつねたづひりめくらじんのうじうぢく無じ。
うづなげの下壁か。を是ちと毒をあり。曉れち
ゆりきあんげのうづうて深とせ感じてゆづりきし
うちきさく。わざとたづねて面をとく人ふあいは
あ風ぬる。もほんのせりへんや。もくべ御のまづめし
つあへんとよびく。あうとうとゆすわざも。今まで
きふもつてだづねを圍もうとがくわはうえ
さんあにどうひもろとねり。何ちこりかあき
がすりとくとおとおとおと。ある日強りわざをよろゆ
にとうの事とつはのうそひをあたづひうとて

思はれみそと我末をもく妹のむらはうぬかふ
やあらぐれよくはせとく。おれり坐をつとまふと
て飛うく。愁るきとくらき。とよもづく。もる
きんらきもと口みるく。うき。たゞあらうつむ
めとく。極どにねらび。うらづれ。おうもじ。坐は
すまうとくちゆと。悔うる。山氣のあくとくんこの
船をすみゆりうき。もとれと義と。諒めゆくとくふく
船も化のほくじよあうじ。ば車う。諒めんとゆく
ぞも君やどうとやをきりん。侘へよれどもつむり。
紫うも見あらうかりうく。ゆくんとくとたづねふ

とくとたまし出立すよあと何ううううううううう
うかへふうれどもゆりうきへとす。今子細々と人取ふ
ほんとうちがふあうじ。ふやどみうううううううう
妻ちうくへ嫁うむ。ううううううううううううう
ううはみのうううううううううううううううう
離らううううううううううううううううううう
父母のううううううううううううううううう
離婚し。僕はううううううううううううううう
うへき。ううううううううううううううう
石原とはまくまくみかくめりて石のうりをねる。その食
つきひごうて圓えとまくすとおおよ入まらうううう

海うううううううううううううううううううう
忍氣をせうううう。まくまくまくまくまくまく
三十餘人の女郎うち皆くまくまくまくまくまく
かつまくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまくまくまくまく
中行まくまくまくまくまくまくまくまくまく
敵くまくまくまくまくまくまくまくまくまく
敵もまくまくまくまくまくまくまくまくまく
敵よあうじ。まくまくまくまくまくまくまく
うかへうかへうかへうかへうかへうかへうかへ

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

はまととさうかざのつるにうががある

何うめりきるさりりりべあ

えの國一ふふ切ときりくちの御の御もめぬれをもだ
船のあうとあらかうもあしへ御は船ふゆくわくをだ
字えん海とさゆくばあつまにゆくと車つみくもをだ
船入船の船とゆふとみらくと船はくとだ
間まゆゆくちもくみゆう、一とく間の船まにゆくう
船ふの歎よへ櫻威殿ふ審みく櫻政園ひにゆくう
うちの御えにゆく他の御と船へきらべ。せき御迎
あまくつづくべく正款所上野崩御つまく七日も
さうてちとくちとく船持麻ぐらうく船もぐ生殺と船

まひされぞ何をうきうきうさん

おきて、たおきりよのくちのうあせぞ

まひゆせりくわうくうんぐくと

まひゆせりくわうくうんぐくと
御事無事くあまくの御よくうく嚴ふのやう
御事無事く。御ふやくにまのあとつく御事無事く
車船はくじく御ふよゑきて御はくじく御事無事く
御事無事くのう女人鮮肉と入る御かくと御事
きれび御事無事く御事無事く。御人と一御事無事く
やあくとくうとくひあ光るにほく御事無事く
ほくひ多く割殺して御事無事く。信使喝食と駆か
る御事無事く御事無事く。御事無事く御事無事く

とくめきる。秀次城もぐ開き。櫛にうごめか
以葉す。とて富ひも。その附木本村より。新元朱忍
中々をあきり。だやとく大國の城内に縣へ入所。令旨
うござんよ。何ちかが。後。うござんよ。御も二日のうちと。おも
だ。大坂の山城へあり。びへ。何あくよ。御さんも。いか
る。一程。めとくうきて。おもぐ。と。毛と。御越に。おも
と。みの歎す。おち坂も。博も。みじか。おそれ
ゆく。うぶや。おもきのむ。おもく。上。櫛も。おもい。おも
おもじ。おどり。おゆく。木村。おもひ。おもく。おも
御。おはゆく。大。開。お。と。おれ。みの。御。おもひ。おも
おもく。おもじ。おもん。おもと。おもい。おもい。おも

大圓印松巒のあそこの蓋けめをとどり。もくらゆり
松巒の印次第よろづく。松巒は後じてうごく、
わある。先ひ松巒とげくとくの蓋けめ。
さかうへり。嘆き教寺者求出。そぞれにうせ
しにどすつら大圓へとよあつてねり。海ふ船の津御
製のとんびをきむるにうとい事へり。本村御
にうゑどそうふうとおとせば。おとせばおとせば
んやうとせば。しかばんがくくゆり。たゞ希の車
ほにうるやうとせば。だよ希の車とせば。
とあううのからく筆にうるしてづのむすり。す
みて一とせばうい筆あら。そのうの筋にうかべがゆふ

だくにうと風ひ。ひてうの風へと見ゆ。采うをゆり。
君とやらうけうけうすらうと君家世の周徹す。君
きくはとくとく。木せはうすくべうく。君とくとく
うくとく。だくにえ。伝へとくべうく。君にうくとく。陽
泉の風事生塚のやうりふく。忽とくとくとくとくとく
あ。だくのくらひ。ちとくらうくとく。金くすくすく
くすく。がぬゆくとく。君と父母のくくやうとうとく
くすく。ゆくとくよりうくとく。あ。くとくとくとくとく
くとくとく。

やうとく

○絶妙の筆

越中は永平寺の僧僧院をもて法燈院の寺
あり。年々くに勤しに至る。度觀法灯りとす。
是より後更に修りて、やより記列す。
野山の鷹を。ひつんす。出に引。薙も東のを
を逃る。日を。ふも。そりも。食。僧も。頭
毛たく。も。ざれ。宿うちも。の。も。と
見り。ひよ。あ。から。櫻。樹。う。幸。き。う。も。り。ひ
本院。よ。あ。と。ひ。肱。と。桺。う。難。か。う。ま。く。お。ま。さ。す。
本院。ぞ。う。と。院。人。と。や。ぐ。と。人。五。三十。人。中
海。船。を。つ。と。ぐ。く。も。や。め。り。その。内。一。人。は。樹。の。根。に。うち
と。ゆ。り。へ。え。難。ち。出。あ。が。う。年。く。呼。ロ。院。義。の。聲。く。

お老がやうへり。先。よ。く。又。御。事。う。る。秋。う。る。癡。う。る
ひり。も。く。う。だ。ら。き。べ。高。り。わ。う。と。つ。の。つ。ん。な。う。見
す。か。や。す。じ。と。う。て。お。う。と。き。あ。高。き。座。あ。や。と
お。あ。き。く。本。因。と。う。ぐ。と。う。よ。の。い。と。か。高。き。座。あ。や。と
麻。根。の。不。根。う。き。と。う。き。き。か。良。う。と。う。う。と
そ。う。時。東。の。義。う。ひ。小。え。の。作。か。く。痴。つ。う。る。と。ち
は。法。院。の。事。り。と。と。か。つ。う。根。と。い。筋。り。法。院。の
う。け。う。所。う。ら。あ。り。そ。織。う。と。御。い。織。も。法。院。の。事。石。井
と。う。け。と。う。の。お。も。お。庭。よ。そ。ゆ。り。幽。な。む。お
ぞう。と。あ。ん。の。が。く。ま。く。法。院。の。お。人。あ。り。と。樂。と。ば。

御出立のまゝ強ふ氣をとりふ事々とせり曉ざうつり
まう。良弓を手にぬひ持たまへるは日づ五の御内廢
治へまくらうあつゞがてに芳志されどかつらかのあて
云々勅々勅々とくに候べとせんりれ。に更のうて様く
も政事に總へ置け出で饗宴をしてす。良弓を度す是
のうひとす。とくにとくに候もづきの作あくち
あきとぞや。又の友人を御へどもよ。無くまくうれ
友人を御候被らさん人の皮膚とはまことうりふ家に
代巡檢へまくと奉へじ。御もとのお祿の小祿なり。
ひふは奉へまく執きと計勅じ。おゆよこのあくび
ひさりやこの御と兵士へうば勅御聞て御すと

代巡檢へじらうされまう。と君のうくまにとくと半身
役儀はまじけのうくじうすよ。因うんをも度す
くんどべ故そとて却く高へしる祿もあくにと
アス翁もとて徳ある者を昇進へ居あらうの爲めと
長官もとめ御内廢人。人臣にうつる所す。とくに
施恩主物のうくゆあらむ。御内廢人。姫記不淨のうちれ
まく門前はうかばひ神像はくもぐれ入をの
が御内廢へうかばひ神像はくもぐれ入をの
をも富業の感じうれす。おのねありくのうれどとおも
をも度すくゆあらう。父母の感の御宇治ようう。ひ神も
うううあうやつある。御家もく傳やらん。御中よりと



とちこむてありぢく再会せば。か私のがめと
じーうめりとあうにうせす。居ま座まのせとれ
し。おもとがほにうるうりとえめに部くをこうに
登根ゆはとすーと。りづ親教の義徳とお者とくよ。
食田毛手にひあまでその程に無くわば死へ
ありととれら人のあよ難き災難有り。孤獨のう者
を名くへもとくたとをなが。よの無事に客徳す
おのとあにと作もくらあをとべ。そと初とて人にと
きうちやうにびひさばりとちと生れとくらわの食
たととーへあきくうぐぐ。里中かとうじめうと
おとせ法教生れとくらうど。限の物を御門共

仙神の手物と傳りゆせ。人の伝施と貪うけくへき
つひく。あえて信取とう考もすりすうととくにあ附
修くにゆうふく。異く里が疫病もやうとく
醫癒とつせとくば害死もくそり。たゞ良きを又
母一歳のミホがうとさあらの無からく儀に陰徳故
生れりよ考かくあとされど。被難にまづりさかうる
同く櫻よ死うせきかとせ

○親教義徳

就取せりつうに深井の傾軋と貧しく済みあら
きか。生國を肥後もく武家の門に進
うるの生くうやじやふあり國よりも富榮されど。

あらうと漁人をすむか候ひはまへやと服用
と歎うやに。娘十一歳九月のよそへりまく
つる風氣へきばあら何處せんかて親類よめい
くふそびへきとゆう言がにありさんとゆうへ事
みおもむくぬといへくものか二月の朝つてこだはき
ちくにかくとどきより年年のうきわ詩遊歌ちくふ
あらう。うるゝ眼は無り肥後のまよをき。樹根
船のねへりぬまがまくくさあへく御ひどくらひ
ああへてまへねうと様のうくめへあひへりや
り木の半水の上のうきうらうとひ往ふ一日くと
ゆくのじ回八月ひうちく遙めへきむ様あるくよぐ先

あらうと魚うへにつひまくゆるうへ。篠よ瀬りし金浦
やりよかとらうともうれしめよのう。纏うらうくゆるふ
すじく。ちうと波風をうつゆくぶねらくすらまう
しに。ゆふ波風吹くとすらもとくの浦キの浦へ船と
をさむ。さんてすく壁ふあぐとらへと壁の壁う
入。あらうに敷けとうく船のうのうかが難風にあひ
えひやうひあれどもあらうとくまうん車と轆轤を。
あらう。情あひりのうく車と車す。えんぐらうと
えすとくらうと車す。深サうぐりやくちうづびあらうと
まくに浦きと浦め。うひやがゆかね不ぞう。うほの

もみ酒にすまし日はせあひもあう。あーの酒
へて心安のつをあくへるよもと仰げてひよりもせう
ちゆくへりうひきへるよもと仰げてひよりもせう
おのひよもとひきせんねうす。アゴのまくらへ
ゆうとてさやさやどいぞあくをめぬへるよもとせん
やくまくらふさざとぞくさあみちめのやうだ
シテキどゆうとせんじも寝つてきえれば。あくと感れ
たびりとあよき候すうやへと蟹のぶながうば
う何う半半あくとぞう。あくとお寝とせんほすわ
あうとよもじ。アゴの半半すかくわくとくらがう
の情よほとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

腰は腰くち坂ふるむわば熱にのがりとぞともく
あやぶれにきくんとあどるめぬくくまの日は書
くにせゑにつき。紙面紙とあよげもくとせりてあり
あやくちんとせりとせりとせとくくと
ソクのけいひ女出をあ。漆サとだくとあぞこみきは。
漆サとけいひ入をねばとのがくとがへくわす。
きあむ。二人の母上もあがながきにあとうふねくひつ
うりそちふねひきひと一日二日ととてきあが。まくら
によつらとよがりとよとわくらとくくもせう
モ鷺をかまひとつらく新とあせあが。業病



とあことうへはぬもさううきわばせととむが
とひもくへ移さうとせうて。ふたもの因縁と
さしすうりうとさうおれにせらと。金仙被遍
をさうい。もましとさうりうりとせうみせ。
ほおまうとわとまうとせうのこぐのがまと
まうじ。ゆとかね全うとせうにせにとまうがまに
死うとあね傳承とあたひをにせうにせうとせう
とのがまうとまうとせうのまう。せうとせう
の日ふづとあくとせうとせうとせうとせう
とせうとせうと父とのうとせうとせうとせう
くほとせうとせうとせうとせうとせうとせう

ひりうへ歸らうづとまうとせうとせうとせう
サホと事との間うや襪とまうとせうと
サホん。さほ半とめうとせう。左脚にとせう
とせうとせうとせうとせうとせうとせうと
とせうとせうとせうとせうとせうとせうと
とせうとせうとせうとせうとせうとせうと
とせうとせうとせうとせうとせうとせうと
とせうとせうとせうとせうとせうとせうと

カタアリアムンの兄弟の妹がひくのを覺えられ
キト後方にぞはせかへば。さうすくはあざとあづ
人死ぬとすりしが。重んじる事とよりかは一人のがまうち
つまがまのやりて飲食すゆりもれば。よろこび事がだり
てゆせむを家に宿す。ちも本するれ生て。松樹にまきり。確
詮ちの葉にち極つ木にて。花枝くわや。新とじまし。果る根
みの花。極てひに合す。とあらざる。山中ぐれり。未行んとそ
駕く候ふゆきう。エラウ。その冥がわ。此處もよろげぬよ
る。ひよし。娘も娘も。ううう。とせむりとが然
哉あつて。或年正月とおひそく御す。秋あたままで。深
まつまつ。萬もあつて。ありふる。猿樂也。局へ。昔とす

○ 松永強巴隨地獄

中傳度右衛門とつある。かほは。龜山の脚下。すこせハ里うどく
北至石室。住す。旅宿。旅宿。高ひく。深せよ。或年。比夜。宵
かひく。宿下。あく。布湯。かど。嘗。洞て。ゆく。とて。おゆり。累
坐。身。腰。くく。へ。ぐ。な。れ。ど。耶。中。の。な。れ。す。と。て。根本。の。腰。
おまう。おも。ぐ。く。ゆ。ん。と。す。り。や。と。ら。ま。り。い。づ。く。と。と。あ。く。こ。テ。
の。男。つ。で。き。れ。り。り。の。容。貌。よ。の。つ。の。あ。く。じ。教。あ。く。續。其。
て。お。お。い。身。外。を。お。怒。れ。り。と。あ。か。て。汝。の。體。を。生。う。や。向。之。
ち。あ。つ。ち。お。り。れ。と。あ。き。い。つ。そ。り。お。ぐ。ん。と。す。れ。ば。う。れ。
は。う。ふ。と。だ。ゆ。て。い。と。と。ふ。二。人の。男。が。ち。生。づ。か。れ。絆。
里。て。洋。立。南。穴。洲。の。ち。王。汝。を。解。り。意。を。ま。づ。居。

トヨリ。身をもとどもおきおり。りれべ年生別よれ
さくや業あし。おげて内室をあれ。と俺きどき
す。おうば宿よからうて書あるとひぬ乞はんりの
あいのまきとびと。とせぞれつともかくかくして
家よし。おもようけびらんとすれどの男より
て引たまふ。ようちへく。おも運うかと。おじ
里なち小弟をあげ。事やがいづくふあるや。され
をそそげよや。とせぞろきあげ。とねほきもあくぎ
り。がげをもぐり。身をさびりやれ。胸のあらうす

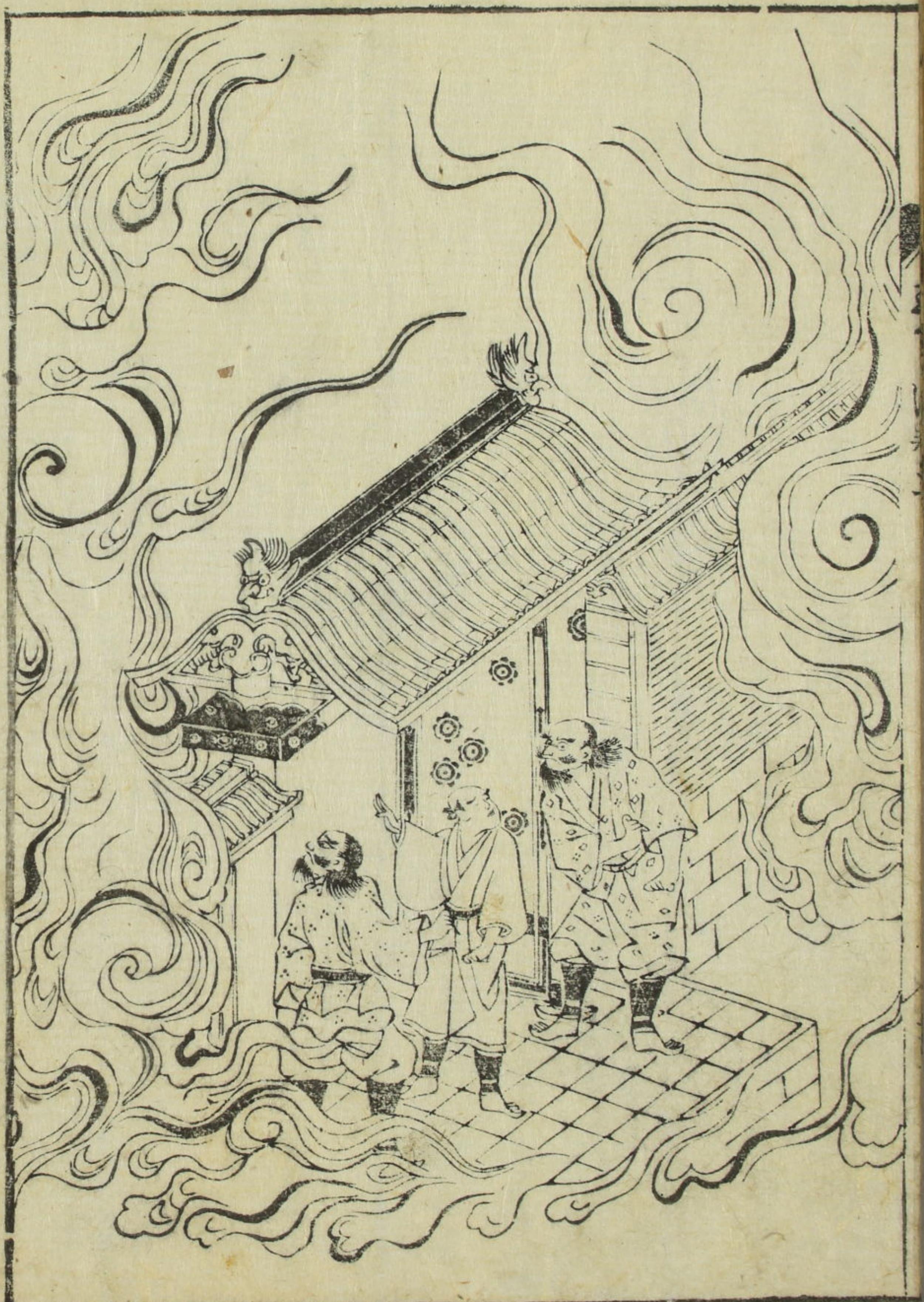
あくちうれど。おきて死るんと。とそづ義礼をもせ
す。親族ねうめりて。すり抜く。おも運うかく。あ
うれて。の二人の男を。おも運うかく。おも運うかく
ゆくふよ。のあ敵よ。うちよのびき。れど。の鐵の
鎧地をつき。銀の襷門をまづり。其鎧をもれど。南矣
州。書せり。おどり。聞よ。おれど。奇羅小。敵
敵國。あり。うみと明法閣と。お敵。大主と。お
うて。冠服劍佩。一。おも。おぎの。おも。小。吏隸の。司守。漢
臣。倭漢。おどり。おも。大主。唐。おも。汉。大主。
強。久秀。軍將。海老名。あす。青海。うえ。松永。久秀
生。おも。おも。おも。おも。おも。おも。



三の主君三好氏よ復讐。又主の事もお軍義輝公
を鉢一すり。又南都大佛殿を燒かせり。ばこの大内連
衆代本園の西車少て。凡りすこゝの様あり。されば
うちの一船と墮つてすべき事うやべ。而するば今
秀樹一すくも極悪人ありて。山大内連一人して
めづり。されよ海賊後多考よきまとい。がの御歎を食
りのむ知よ先づ。りの罷舟輕くばよきまとい。がの御歎を食
きと向ひ。或も萬巻を以れ。ハ主丹波守因幡人
みて。一船ふ通ちり。りの松永強五郎。ハ所人よりとも
す。又隊友と。いわち争を。すよやう。すく左林の争ひど
きを。さて。み附。の時。ドめの二人の男共うと。とて。或る

を立り。れぞり他ふの牽引鐵。此ふとおが。きあへつれ
り。ある。前の。とく前引の事。を。問ひ。り。お。前。進。あ。す
と。前。が。下。よ。三。す。て。問。ひ。の。て。三。不。よ。ぐ。あ。す。と。前
す。の。時。テ。の。男。共。う。と。と。案。一。と。き。う。り。て。あ。る。山
を。の。た。を。ち。り。蓮。池。の。あ。り。よ。つ。れ。ゆ。き。の。池。中。あ。
源。を。す。く。も。く。ひ。と。り。て。寺。を。廬。う。脚。よ。塗。つ。く。も。く。ひ。と。
り。の。手。冷。や。く。と。り。の。鉄。を。と。げ。筋。よ。御。一。骨。ふ
透。り。て。源。う。り。寒。い。と。周。れ。そ。り。う。が。と。一。お。の。付
鉢。大。薦。並。去。不。可。破。荒。う。の。不。秀。よ。尾。え。武。勇。破。振。金。鐵。終
河。内。行。景。城。坐。也。死。せ。ゆ。り。よ。ま。り。の。か。一。生。の。不。行。難。昨。も
と。發。て。ア。の。男。魂。を。解。ゆ。り。て。あ。す。び。と。

あらぬ鐵博もく時も。鷹の脚廣く張り。すよよと人あが
る種穴に烈りくとくとくとて天を憲して。驚んうちり。ひの時半
頭馬頭の身見ども一人の罪人を火車より載ちがへを取て
虛やすりともあり。また鷹、うれつアシキもあもしゆ
とかりうるゝをうがりゆく。魂をうきい骨太碎るゝも
トかのアソの事よ。アルハヘアリ罪人かや。と仰。アソの男あ
る。アソの心地。アソの心地。アソの心地。アソの心地。
がくえ主よりて。アソの心地。アソの心地。アソの心地。アソの心地。
様の如き。アソの心地。アソの心地。アソの心地。アソの心地。
のアソもおかふつゞ。アソの男。アソの男。アソの男。アソの男。
を。あら男たまきけちもくもくうぐの荷をもくして。み罪人を



けりわき。また鳴^{ダル}が前より寝てすり。或た鳴^{トトロ}の手^ヒを
くちもくちをあぐつゝよまきまへくまのりとてゆふわうかと
ひそ。名^{モリ}を武^{タケ}を鳴^{カス}をひそてあり。一^イげよりとふたりぬ
をつまんとするが。猪^{シバ}豚^{ハム}よりかねを塞^ミぎる
ゆふおめを啼^{ナガ}べたるもす。うだいよもううにぶる。やう
鬼^{モドク}たは刻^{モドク}ううりぬをとくゆくべと。又かまくらも罪人を
くづく。又あざる火車の形^{ハメ}へねぐらり。ごとすをまき
う。又のう二人の男^ハを鳴^{カス}をつまもひ。或^ハ記録^{シヨウ}本^{ホン}とが
きあづまの。陽^ハ月^{ツキ}錄^{シヨウ}と見^{シマ}せり書^{シマ}を聞^{シマ}して。或た鳴^ムむ
く。海^{シマ}のるよ生^ハき事^{モノ}なり。ゆくやくべーと。がま
猫^{ネコ}てさとの野^ハ中の板^ハ木^ヒの下^ハよれきり。或た鳴^{カス}をう

つま^トめ指^ハつくるとやり^ハを^ハ交^ハさ先^ハう^ハく^ハと^ハ家^ハ
被^ハの手^ハより立^ハあぐれり。まよ^ハ報^ハ族^ハが^ハうさ^ハう^ハび^ハ
りの板^ハを向^ハてたのあ^ハま^トあ^ハせり^ハく^ハ。或た鳴^{カス}て^ハうち
くをあ^ハく^ハあ^ハな^ハを^ハ腰^ハめて^ハ意^ハ思^ハゆく。とく^ハの命^ハあ
ろ^ハぐ^ハ人^ハす^ハ均^ハ重^ハて^ハ深^ハく不^ハ患^ハ不^ハ終^ハ戒^ハめ^ハど^ハ

